

バラの季節

漢字で書くのがとても難しいことで知られる薔薇ですが、ちょうどこの季節は春咲きのバラが美しいことでも知られています。この時期、都内でも鳩山会館、旧古河庭園など数多くのローズガーデンで様々な色のバラが咲き誇り、ニュースの話題にも取り上げられています。私が住む相模原市緑区でも光学ガラスメーカーとして知られる株式会社オハラ相模原工場*では、春と秋の2回、敷地内にあるバラ園を無料開放しています。正門入口横のローズガーデンでは、およそ150種600株のバラが咲き誇り、匂い立つ甘い香りと多彩な花色が私達の目を楽しませてくれます。

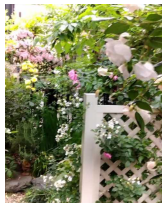


バラはバラ科バラ属の総称で、分類学上はバラ目 Rosales バラ科 Rosaceae バラ属 Rosa をさし、一般的には5弁の花びらをもるつる植物で葉や茎に棘を持つものが多いとされています。原産地はチベットから中国南部の雲南省からミャンマーにかけての地域と想定され、ここから東アジア各地や西アジア、ヨーロッパ、さらには北アメリカへと伝播し、数多くの品種が生み出され、今ではその数7万種とも言われています。見た目の美しさだけでなく、ロサ-ダマスクエナという品種は、別名「ダマスクローズ」という別名で知られる香料(ローズウォーターの原料)で、トルコ、イラン、ブルガリアなどで多く生産されています。日本で購入すればとても高価ですが、かつて家族旅行でイランを訪れた時には2リットル入りのポリタンクで購入して持ち帰り、友人や同僚への土産としました。また、バラは食べられる花(edible flower)としても活用されており、研究や開発も進んでいます。

英語の rose という名はラテン語に由来し、ギリシア語の rhodon やケルト語の赤色を示す rhodd が語源と伝えられています。「世界史」の授業にも登場するイギリスの薔薇戦争は1455年から約30年間続いた王位継承をめぐる内乱で、ランカスター家とヨーク家の争いで知られています。前者が紅バラ、後者が白バラをそれぞれ紋章としたことに因んで名付けられた、とされています。

さて、私が武蔵大学で行っている「人文地理学概説」の講義でもバラの生産を事例として扱います。そこで登場するのは、野生動物公園で知られる東アフリカの国ケニア。実は、日本におけるバラ(切り花)輸入量の第1位がケニアで、六本木と広尾にはケニア産のバラの専門店があるほどです。最近では四季咲きのバラも増えましたが、バラの収穫が少なくなる季節には店先に並んでいる花の横にひっそりとケニア産と書かれたりしたりしているのを見かけます。日本とケニアの意外な関係、ご存知でしたか？それを支える人々の営み、戦略とは…？

最後に、わが家でも見よう見まね
で育てたバラが 10 数種類咲いてい
ます。切り花にして校長室に飾っ
ていますので、お時間があれば訪
ねてみてください。



わが家で咲いた赤色のバラ 3 種(アンブラント、オクラホマ、ブラックティー)▲
わが家の野放しのプランターで収穫したイチゴ(品種不明)▶

* 1935 年に創業した光学ガラス産業の老舗で、アポロ 11 号やすばる望遠鏡、国内
最大の望遠鏡「せいめい」でも同社の開発したクリアセラムTM-Z が採用されている。

校長 石飛 一吉